

随 想

惣津 律士

最近の異常天候は、本年の農業生産にかなり悪い影響を与えつつあるようである。畜産についても、牧草、飼料作物の生産に支障を与え、ひいては経営に圧迫を加えることが懸念される昨今である。何十年か先きになると、農業産業の形態もかなり変化して、企業経営が主体をなすようになって、価格保証対策も取られているものと思われるし、科学の力で天候を変えることも可能になっていることであろう。しかし、現状で将来の空想にふけっているわけにいかないのです、いきおい防衛的な態度を農家にとるようになる。

現在、農業で価格保証のあるものは、米と専売局の購入するものくらいであるとは誰れしもいう言葉である。そうであるかどうか解らないが、酪農をやめて煙草栽培に転向する向きが多いと聞く。生産牛乳は近いうちに、価格保証がされる事になっているが、価格変動のはげしいものについては、農家が1度痛い目に会くと、容易に立ち上がれないから深刻である。借金で文字道り首が廻らなくなる。そしてこの損失は始末は農家自らがしなくてはならない。ここに農政の谷間がある。

農林統計の上に現れている本県農業経営規模別農家経済状況を見ると、五反歩以下の農家は、農外収入に大きく依存し、五反歩から一町歩の農家は農業所得と農外収入が相なかばしているが、それを合計しても三反歩から五反歩の農家の所得に及ばない。さらに一町歩以上の農家になると、規模が拡大するにつれて農業所得が多くなっている。すなわち、農政の谷間の影響を深刻に受けるのが、五反歩から一

町歩の間の農家群である。勿論この階層は、兼業農家か専業農家の階層に漸次分化していき、孤立化するとは思わないけれども、この階層をこのままの状態に放置出来ない。

国の対策を県において県の実体に即して是正も出来ず、そのまま受入れて農村に流している現状はどうにも納得出来ないけれども、何んとしても我々はこの階層に自立農家として立ち上がる力を与えなければならない。これは大切な仕事であるが、この階層は心から切望している。

会議で論ぜられている農業問題の解決への発言が、時によって実情に即しない理想論であったりする場合があるけれども、自立農家即企業農家への育成のための熱意にほかならない。

この難局をきりぬけようと真剣に取り組んでいる為政者と農家の態度が、新しい日本農村の建設の警鐘となりつつあることを、私は信じている。

気をつけましょう

◎飼料について◎

近時、飼料は高値、畜産物は、安値つづきで、一般に飼料の品質が低下しているようであり、養鶏試験場（飼料検査所）の昨年の検査成績では、特に魚粉、ぬか類に品質の悪いものがありました。

魚粉では玉島市のAメーカー、井原市のBメーカーのものはともに粗蛋白質 40～55%を保証しながら、分析の結果では 20～30%程度しかなく。異物が 30%前後混入しておりました。

また、ぬか類の中に異物が 50%前後も入っているものがありました。

これら飼料検査の成績は県広報で発表されておりますので、目を通してほしいものです。

こうした実情から考えて、飼料の購入および使用にあたっての注意として、保証票のない配合飼料は使用しないようにしましょう。特に魚粉、ぬか類は悪いものが多いようですからお互に気をつけましょう。

なお、魚粉の品質の保証については、岡山県魚粉工業協同組合が自主的に農林省の登録保証票に準じて 証 印を付して販売するようにしていますので、つとめてこのような 証 印の付してあるものを購入されるようおすすめします。

品質について疑問のある場合は、養鶏試験場内の飼料検査所に送ってもらえば、事情の許す限り異物検査を行ないます。

今月の畜産物市況

牛枝肉・豚枝肉・鶏卵・食鶏

牛枝肉

強い！強い！

4月相場は3月末からの値上がりをそのまま続け、昨年同期に比べ、メス1kg当り60円高、ヌキ71円高、オス89円高と全く予想外の高値となり、小売店もついに値上げに踏切った。

これは、需給のバランスがくずれたというより、産地素畜の高騰、および並肉用の老廃牛の出荷がなくなり、肉用を目的として全ての牛が肥育され、立派なものが多くなったことが全体の値を吊り上げている。

今後の価格推移の見通しも、気温の上昇によって一般の消費が減退しないかぎり、下押し材料は見当たらないのが現状で、当分強気を持続しよう。

豚枝肉

少しは期待！

4月一っぱいの相場は300円（大阪市食肉市場）を中心に、比較的安定した値動きに終始した。

5月以降の相場も小巾な動きとみられるが、5月後半からの東北地方をはじめ、順次農繁期に入るので、出荷が手控かえられ、また、加工筋の手当て買いが活発となるものとみられるので、値上がりが期待されよう。

鶏卵

期待薄！

4月の相場の推移は、前半170円中心の小動きであったが、中旬頃からジリジリ下げになった。入荷が徐々に増加したことと、末端の需要があまり活発でなかったことによるものとみられる。

5月以降もだいたい大きな変化もなからうが、本格的な暑さもまだまだのところから産卵の低下はなく、入荷も順調であって業者の手持ちも増加傾向にあり、また、野菜等の出回りがますます盛んになる頃で、卵の消費を圧迫するなどから、今後、本格的な暑さが来て産みづかれが出るシーズンまで、あま

り期待できないのではなからうか。

食鶏

いま少し！

4月相場は全く変わらずで推移した。市場の傾向からして、加工物より生肉のほうが売れ行きがよく、産卵最盛期ともなれば廃鶏の出荷も少なくなるので、いま少し高値がみられるのではないかとされている。

ニュース・パトロール

ジャージー育成牛を放牧 蒜山の県乳牛育成場

緑に映える蒜山高原三木ヶ原（真庭郡川上村）の県乳牛育成場の大規模草地に、このほどジャージー乳牛の育成牛 75 頭が放牧された。川上、八束、美甘、新庄、中和、湯原、久世など真庭郡内 7 ヶ町村と阿哲郡大佐町の酪農家から委託された生後 7 ヶ月以上 24 ヶ月未満の未経産牛を、これから 10 月までの半年間、育成場に常駐する専門技師たちが飼育管理にあたるものである。乳牛にとって、大切な育成期間を高度な技術で飼育管理し、乳牛の質の向上をはかるとともに、放牧で労力節減と経営合理化をはかるとをねらいとしている。

トラックで育成場に到着したジャージー牛は、発育状況や、結核、ブルセラ病、ピロプラズマ病などの検査を受け、背に番号を焼印され、上蒜山山ろくの広大な牧野に放牧された。

なお、委託料は生後 1 ヶ月～12 ヶ月までの子牛は 1 日 75 円、13 ヶ月～24 ヶ月まで 80 円

（山陽新聞 5 月 4 日）

畜産センター完成 美星町—指導部門の強化に

小田郡美星町農協は、37 年度からスタートした同町の農業改善事業のしめくくりとして、同町 3 山に総事業費 1,446 万円で畜産センターを建設していたが、このほど完成、7 日落成式を行った。同町は積極的に乳牛の導入を進めて来ており、同センターを中心として診療、人工授精、経営など指導部門の強化が期待されている。

完成した畜産センターは建て面積 476 m²の近代的な施設、1 階には家畜診療所、人工授精室があり、牧草こん包、カッターなどの機械もいれ、畜産指導の中心として運営しようというもの。

（日経新聞 5 月 8 日）

肉豚の集団産地を作る

県種豚改良協議会

岡山県種豚改良協議会（熊本強会長）の 40 年度総会が 5 月 11 日岡山市磨屋町の県農業会館に会員約 100 人が集まって、開かれた。

同協議会は県下の養豚農家が集まって、優良肉豚確保のための種豚改良事業を行っている。総会では 39 年度の事業報告のあと 40 年度の事業計画として①県が本年度計画しているヨークシャー種雄豚の導入貸し付け計画をもとに、肉豚の集団産地の実現につとめる。②養豚に関する講習研究会を各支部ごとに開催し、きめの細かい研究を進める③市況動向調査を数多く行い、計画生産の資料とする一などを決めた。そのあと、松崎格農林省大宮種畜牧場茨城支場長の「豚の改良と産肉性について」の講演があった。

（山陽新聞 5 月 12 日）

家畜保健所整備推進懇話会が初会合

県農林部長の諮問機関として家畜保健衛生所の統合整備問題を審議する岡山県家畜保健衛生所統合整備推進懇話会（山田保会長、委員 9 名）の初会合は、12 日岡山市古京の「三光荘」に山田会長ら 8 委員、県側から山下農林部長、出口畜産課長らが出席して開かれ、県側から現状の説明があった。

家畜保健衛生所は家畜の飼育、繁殖の衛生指導や防疫、診療、授精などが業務で、現在県下には農林事務所単位に本所 9、支所 19 の 28 ヶ所がある。1 ヶ所当り職員数は 3 人弱で、これでは家畜飼育の多頭化、集団化に伴う家畜疾病等に対処できないとして、関係の県条例を改正して同所を整備統合し、特に伝染病の予防と家畜衛生指導を重点的に実施、家畜診療、授精業務は民間の団体や開業獣医に移すという方針を打ち出した。

（山陽新聞 5 月 13 日）

乳牛の多頭飼育を奨励

倉敷市畜産課は最近、頭打ちとなっている乳牛飼育を今年は大々的に普及して、多頭飼育によるもうかる畜産にしようとい力を入れる。このためクーラー・ステーションの設置や通信教育のような制度を実施することを検討している。

岡山畜産便り 1965.06

現在、市内の乳牛は760頭（搾乳牛500頭）、1戸平均4頭飼育で飼育農家は200戸足らずである。一昨年の計画では1,000頭を突破する計画であったが、地区の工業化等の影響から頭打ちとなっている。

牛乳消費量の急増や大小の加工場があるため販売には有利であり、多頭飼育、協業経営、飼料対策の指導、資金利用等により、“もうかる畜産”に本腰を入れる。

（山陽新聞5月12日）

畜産振興計画の立て直し

美作農林事務所は6日、英田、勝田両郡内10ヵ町村の畜産の現状を調査、本年度から管内の畜産振興6ヵ年計画を立てる。

同事務所は36年に管内の畜産振興計画を立てたが、その後農村労働力の都市流出、牛乳の需要増など、現状とかなりくい違った面が出てきたため、もう一度計画をたてなおすもの。

調査は酪農、和牛、養豚、養鶏、草地改良の5部門にわけ、今後の頭羽数増減の推定や制度資金の利用予想まで調べる。

（山陽新聞5月17日）

農業経営資金を貸付け

岡山県信連—国との融資と併用

県信連は6月15日から新しく農協金融制度として農業経営資金の貸付を実施する。この制度は国の制度融資が設備資金に限られている欠陥を補うため酪農、養豚、養鶏、果樹農家の経営資金として自主的に併用融資を行い、企業経営の効率化をはかってゆこうというもの。

農業の企業経営を行うための経営拡大資金は、農業近代化資金か農林漁業金融公庫資金に限られ、それも国の利子補給のある制度融資のため設備資金に限られている。このため制度融資は頭打ちの状態、農家からは対象ワクを経営資金にも拡大するよう強く要望されている。こうした農業金融の背景から県信連では県信用基金協会とタイアップし、同協会の債務保証といううしろだてを得て、自主的に独自の農業経営資金貸付要綱を定め、40年度に一応、3億

5,000万円の資金を用意して実施にふみ切ったもの。貸し付け対象は、現在、企業経営を行いさらに経営を拡大を図ろうとする酪農、養豚（肉豚、種豚）、養鶏（採卵、採肉）、果樹（温州みかん、ナシ、モモ、露地ブドウ）の4事業である。

（山陽新聞5月17日）

岡山畜産便り 1965.06

畜産部門協業経営相談所開く

県農業経営指導協会

岡山県農業経営指導協会は40年度初の農業経営相談所を県下4ヶ所（5月22日＝津山市京町、県農協中央会津山支所、27日高梁市松山、高梁支所、28日＝笠岡市笠岡、笠岡支所、29日＝岡山市磨屋町、県農業会館）で開いた。

これは協業経営の指導に当たっている同協会が現地で実際に農家の悩みを聞き相談に応ずるもの。今回は畜産部門（酪農、和牛、養豚、養鶏）について行われ、講師は小郷県畜産課係長、渡辺県経済連養鶏課長ら6人。

出席した同協会梅田講師の話によれば、各会場とも農家の出席者は少なかったが、出席した人については納得のゆくまで相談ができ、大いに効果が上がったものと思われる。

（山陽新聞5月21日）

県農業学会開く

岡山県農業学会の40年春季大会は1日、岡山市磨屋町の県農業会館に会員約500人が集まって開かれた。

大会ではまず会員の中からすぐれた研究をしたものとして、池畑勇作（県農試技師）人見進（同）石橋恭一郎（県三徳農業研究所所長）岡田芳磨（県農試技師）皆木信昭（勝間田農林教諭）織田薄（県農林部専技）の6氏に第1回県農業学会費が贈られた。

次いで講演とシンポジウムに移り、大会の研究課題である「関西型零細経営における農業近代化の方途について」と題して柏祐賢京大農学部教授が講演、兼業農家を中心とする農業の進むべき道について話した。

（山陽新聞6月2日）

中央の動き

畜産、大幅な伸び

昨年の農業生産指数

農林省は5月12日、39年度の農業総産出額、生産農業所得および農業生産指数概算結果を発表した。

それによると、農業総産出額は2兆6860億円で前年に比べ9.9%増、生産農業所得(総産出額から肥料、農機具など物的経費を差し引いたもの)は一兆6,320億円で同10.5%増となり、ともに37年に次ぐ戦後2番目の伸び率を記録した。

畜産部門についてみると、産出高は4,995億円で前年比5.3%増。これは価格が鶏卵、豚、ブロイラーを中心に5.6%下落したにもかかわらず生産量が11.5%増となったため、耕種、養蚕部門に比して大きな伸びを示している。

また、鶏卵は前年より生産が16.1%ふえたが、価格は逆に13.2%下落、豚も生産量が7.4%増加したが価格は7.4%低落、一方生乳は前年より生産量10%、価格5.6%と、ともに伸び、産出額は1,036億円で16.2%ふえた。

(山陽新聞 5月13日)

農林業は53万人の減少

昨年度の労働力調査

総理府統計局の発表した39年度の労働力調査によると、就業者数は4,690万人で前年度に比べ52万人ふえた。このうち農林業就業者は1,184万人で同53万人が減少。これは減少率4.3%で、昨年度の4.8%より減少割合は少ないが、中期経済計画で想定した年率3%減よりは高い率である。

(山陽新聞 5月18日)

低調な近代化資金の利用

中四国農政局管内では農業近代化の推進に大きな役割を果たしている政府の近代化資金の利用率がきわめて低調で、39年度は融資ワクの80%にとどまり、全国平均の9割(推定)をかなり下回った。県別では配分額を完全消化したのは愛媛県だけで島根、広島、山口もほぼ消化したが、岡山、徳島、高知、香

川の各県は70%以下の達成率にとどまる低調ぶりであった。

その原因は、災害が連続して起り、天災融資制度へ資金需要が肩代りし、赤字農協では原資が不足している(高知)、農協合併や農協連の組織整備途中で、共同利用施設にまで手が回らなかった(岡山、香川)、農業そのものに対する意欲が上らない(鳥取、島根)などとみられる。

今年度は、同農政局の融資ワクも昨年度比12%増の112億となり、各県への配分額もふえたので、各県に末端へのPRと融資ワクの活用を強く要請している。

(日経新聞 5月13日)

簡易草地造成事業など要望

中四国農林主管部長会議

中四国9県の農林主管部長会議は20日、岡山市天神町の岡山農林総合庁舎で開かれ、41年度農林予算編成に当たっての中四国農政局の意見、要望についての最終協議を行った。

会議には中四国9県の農林、農地経済、農務などの主管部長と農政局側から藤田局長や各部長が出席、これまでの藤田局長や各部長が出席、これまでの農林主管部長会議の意見、要望をもとに作成した要望事項原案について、各県から意見や補充事項の要望があった。農政局のまとめたもののうち、新規事業として①地域開発区域内農業振興対策調査②中国縦貫自動車道など対策調査③山間地稲作省力技術導入促進事業④肉用経営モデル地区設置優良素畜選抜促進事業など、61項目の要望事項をまとめている。

これに対し各県部長からは、簡易草地造成事業(岡山、島根)農道関係予算の増額(岡山など各県)など強い要望が出された。

(山陽新聞 5月21日)

地方の動き

ソ連へ肉用種鶏輸出

岐阜市の後藤孵卵場

来日中のソ連農業省の2技師は、このほど岐阜市西野町の後藤孵卵場を訪れ、肉用種の種鶏7,500羽

岡山畜産便り 1965.06

を買い付けた。同孵卵場は昨年5月、肉用種の種びな4,300羽をソ連に初輸出したが、ウクライナ国营養鶏場で飼育した結果、その優秀性が認められて再度の買い付けとなったもの。

今度輸出されるのは白色ロック5,000羽、白色コーニッシュ2,500羽で、いずれも同孵卵場が約8年前アメリカから原種を購入し、改良を加えた独自のブロイラー兼用種。価格は同孵卵場渡し1羽白色ロック200円、白色コーニッシュ500円。

なお同社は昨年中に香港、マラヤなど東南アジアへ種鶏、コマースシャルびなを含めて28万羽を輸出した。

(日経新聞 5月2日)

酪農大 さらに検討

中国地方知事会議

中国地方知事会議は28日午前広島市基町、広島県庁第一応接室で永野広島、加藤岡山、橋本山口、石破鳥取、田部島根の5県知事が出席して開かれ、各県から持ち寄った国への要望事項を中心に意見を調整、今後関係方面へ強力に働きかけることを申し合わせた。

会議の席上、加藤岡山県知事は、中四国酪農大学の設置について「岡山県は県立酪農大の施設、設備を無償貸与する用意があり、地方競馬協会からも7,200万円の出資金を得られる見通しがついたので、できるだけ早く財団法人として設立したい」と述べたが、他の知事は各県の出資金や現有機関との関連でいまだ少し研究期間が必要だとして結論が得られなかった。

(山陽新聞 5月29日)

全国平均より7%低い

広島県—39年の牛乳生産費

農林省広島統計調査事務所がまとめた、広島県下39年度の牛乳生産費は、100kg平均(乳脂率3.2%)3,318円と全国平均に比べて7%も低かった。費目別では飼料費が64.7%と生産コストに占める比率が最も高くついで飼育労働費の20.9%と以上の2つで全体の85.6%を占めている。

乳牛1頭当りの純利益は平均2,287円となってい

るが、飼育頭数別に密な計算をすると、15頭以上の大規模経営では1頭につき12,710円、それ以下の中規模経営では763円とそれぞれ収益を得ているのに反し、1頭を育てる零細経営では23,219円もの赤字となり、家族の労働報酬さえも計上できない結果を示している。

(日経新聞 5月2日)

大詰めにきた山口県の乳価交渉

山口県下の乳価交渉はようやく大詰めの段階を迎えている。すでに農協資本系の下関酪農が1.80当たり4~5月69円、6~9月75円、10~3月69円の線で妥結、同じく防府酪農も4月~5月70円の線を打ち出しているが、問題の焦点は県下の生乳生産量の30%をにぎる明治乳業山口工場との交渉とみられている。

同社では広島県などと同様、4~5月69円(うち2円は奨励金)6~9月71円、10~11月67円、12~3月65円の線を内示している。一方生産者は4~5月71円を最低線として譲らない構え。しかし明治側では①下酪に比べ運送費等を考えると実質的には変わらない②乳価もさることながら増産指導の強化を約束している一などをあげ事実上、ヤマをこしたとみている。

(日経新聞 5月27日)

小規模飼育は不利

鳥取 養豚、養鶏で呼びかけ

畜産の大型化が進められている中で、鳥取県の場合いまだに“縁の下の養鶏”や“裏庭養豚”といった小規模経営から脱け出せないものが多いが、農林省統計調査事務所は昨年の調査をもとに数字の裏付をもって、大型化を呼びかけている。

養豚については、子豚1頭当りの生産費が、母豚1~2頭の規模に較べ母豚3~6頭では約12%安く、また離乳後の育成費でも3~6頭の場合が16%も割安である。収益面では、1日あたり自家労働報酬が母豚1~2頭326円、3~6頭1,613円と大きな開きがあり作業労働時間も3~6頭は1~2頭の半分、約10時間ですむとしている。

養鶏については、卵100kg当りの生産費が飼育羽数別にみて多数飼育ほど安く、又、収益面でも規模

岡山畜産便り 1965.06

が大きくなるほど有利であると指摘している。

(日経新聞 6月1日)

流通機構の総合センター建設へ —山口経済連—

農業近代化のにない手として農協の合併、大型専門営農の出現が相次いでいるが、山口県経済連（会長相川教信氏）では、これに対応した流通機構の近代化を図るため、40年度から、かねて計画中の総合中央センターの建設に乗り出した。建設資金の一部として農業近代化資金約5,000万円を導入することもこのほど農林省および県の下了解を得た。

同センターは吉敷郡小郡町の山陽本線沿いに管理事務所、肥料、飼料、農薬、生活資材、食品、衣料、特殊用品の合計7むねの倉庫群および車庫と修理工場を建設するもので、9月末までに完成する。さらに第2計画として、みかんの大選果場をつくる予定

(日経新聞 6月2日)